

<全体分析>

試験時間 120分

解答形式

論述形式

分量・難易(前年比較)

分量(減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加)

難易(易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

分量は大問3題「400字×3題」で例年通り。難易度もほぼ例年通り。

出題の特徴

Iは、2017・18・20年度は近世を中心とした出題であったが、本年度は19年度と同様に古代～近世のテーマ史の出題に戻った。20年度はII・IIIともに近代から出題され、現代は出題されなかったが、本年度はIIの間4、IIIの間3・4は現代からの出題であった。また、近年、史料を利用した出題が多かったが、本年度は出題されなかった。IIIの間1では定着しつつある短答式の問題も出題された。また、I・II・IIIともに社会経済分野からの出題であった。

その他トピックス

Iの「土地制度と税制」に関連するテーマを直前講習「一橋日本史テスト」第2講で、IIIの「東京の人口」に関連するテーマを冬期講習「一橋大日本史」第3講でそれぞれ扱った。

<大問分析>

番号	出題形式	出題分野・テーマ	コメント(設問内容・答案作成上のポイントなど)	難易度
I	論述	前近代の土地制度と税制	一橋大本試における頻出テーマの一つである。問1「調と庸」、問2「荘園公領制」、問3「室町幕府の財源」、問4「分地制限令」にそれぞれ関連する出題で、十分準備ができていたと思う。いずれも基本的な知識により解答が可能であるので、設問ごとの字数のバランスに気をつけてまとめればよい。	標準
II	論述	東京の人口	2010年度に統計表を用いた「大正～戦後期の大都市への人口集中」が出題されている。問1「江戸幕府崩壊後の東京の人口の急減」はやや難。問2は発問の仕方がやや曖昧なので、「都市下層社会の劣悪な生活」と「劣悪な労働環境」に関する著書と作者を「それぞれひとつずつあげる」解答とした。問3の「大正デモクラシー期」と問4の「戦中・敗戦直後期の情勢」はいずれも一橋大本試では頻出だが、学んだ知識を設問の要求に合致させてまとめるのはやや難しかったであろう。	やや難
III	論述	近現代女性史	2017年度に史料を用いた「近代の女性史と参政権の動向」が出題されている。問1の短答記述問題はいずれも基本的なレベルであり取りこぼしは許されない。問2「新しい女」はやや難。問3の「戦後の民主化政策」に関連する事項は一橋大本試では頻出である。問4「男女雇用機会均等法制定の背景」はやや難。	やや難

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

一橋大学の日本史は難度が高く、教科書を中心とする表面的な知識だけでは高得点のとれないものが少なくない。しかし、出題されるテーマは毎年ほぼ一定の範囲内に限定されているので、過去問の研究は不可欠である。前近代では、テーマ設定が社会経済史に加え、法制史を中心とする政治史や、外交史・文化史の出題もみられる。また、近現代では、明治・大正期における寄生地主制や資本主義の発達、15年戦争～戦後期の政治・外交・経済などを軸に、社会史に関する問題も増えている。そこで、これらを中心に、頻出テーマに対する理解を深めておくとうまいだろう。